発行日：2040年１月21日　　岐　阜　未　来　新　聞　　岐阜市未来共創WS：Aグループ

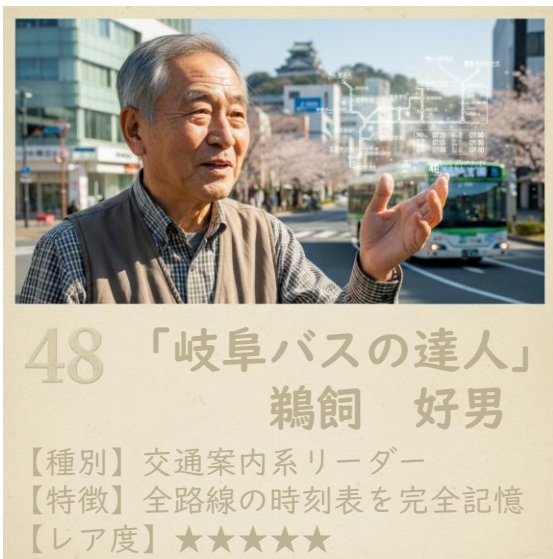
全世代がわくわくできる！つながる！安心できる！岐阜市

岐阜市未来新聞
号外

（編集者）
あんな　つな
のりくん　はるちゃん
ほりえちゃん
やまちゃん　後藤

（発行日）
2040年（令和22年）
1月21日

地域リーダー図鑑が生んだ「会いに行きたいリーダー」



（「岐阜市地域リーダー図鑑」より）

2026年にスタートした「地域リーダー図鑑プロジェクト」が、想像を超える成果を生み出している。現在、岐阜市全46校区で320人のリーダーが登録され、年間延べ1万8千件の「訪問交流」が実現。この取り組みが移住促進にも大きく貢献し、過去5年間の移住者数は従来の3.2倍に達した。「リーダー図鑑に載りたくて移住してきました！」と話すのは、東京から移住した山田さん一家。父親の健太さん（38）は既に校区リーダーとして子どもたちのプログラミング教室を主宰し、地域通貨で年間12万ぎふコイン（約6万円相当）を獲得している。特に人気の高い48番・岐阜バスの路線や時刻を脳裏に焼き付けている「岐阜バスの達人」こと鵜飼さん（72）には「レアキャラ鵜飼さんに会いたい！」と県外からの訪問者が絶えない。各リーダーの得意分野は料理から工作、歴史案内まで多岐にわたり、「生きた図鑑」として機能している。

よりみちカフェがつなぐ地域の絆
地域通貨「ぎふコイン」×古民家リノベーションで実現した新しいコミュニティ

岐阜市が2025年から推進してきた「よりみちカフェプロジェクト」が15年目を迎え、市民の85%が地域活動に参加する全国屈指の成果を達成した。「よりみちカフェ」は古民家をリノベーションした「持ち寄り喫茶店」で、現在市内127か所で運営中。最大の特徴は地域通貨「ぎふコイン」の活用だ。住民は野菜や手作り品を持参するとぎふコインがもらえ、そのコインでコーヒーや他の人の持ち寄り品を購入できる。商店街での買い物にも使用でき、地域内でお金が循環する仕組みとなっている。築80年の古民家を改装した「ながもり庵」（長森地区）では毎週火曜日、0歳から90歳まで幅広い世代が「みんなでごはん」に集う。「最初は野菜を売りに来ただけだったのに、気づいたら地域の相談役になっていた」と話すのは田中美智子さん（67）。カフェの運営費は地元企業17社の協賛で7割を負担し、残り3割を住民が地域通貨と労力で補う仕組みが定着した。利用者は延べ4万2千人に達し、参加者の9割が「地域とのつながりを実感し、安心感を感じた」と回答している。この「気づいたら参加していた」という自然な関わり方が高い継続率を支え、日常の延長線上で生まれるつながりが持続可能な地域コミュニティを実現している。

（よりみちカフェの様子）

はじめの一歩文化醸成

地域住民との関わり方に不安のある市民をサポートする「はじめの一歩応援文化」が岐阜市全域で活発に。２０２８年策定の「かかわり方ガイドライン」により、トラブル発生時の責任の所在や地元コミュニティへの参加方法が明確化され、新規参加者数は年間２８００人に達した。「好きなことから、できる範囲で、みんなと一緒に」の理念で子どもの見守り活動参加者数は４．２倍に増加。「若者が周りに集まってきてうれしい」と語る高齢者も多く、世代を超えたふれあいが実現している。

「ぎふチャット」活用によるまつりの復活

「雑談から何かが生まれる」をコンセプトに開発された地域ＡＩ「ぎふちゃっと」の活用をきっかけに、則武地区で20年ぶりに「則武秋まつり」が復活した。よりみちカフェでの多世代のおしゃべりからＡＩが会話内容を分析し、人がつながるイベントをいくつか提案。そのうち、特に要望が多く集まった、秋まつりの復活が今回実現した。